

SKYMENU 活用授業 実践レポート

お名前	富樫 大輔	学校名	那珂市教育委員会 (実践校:那珂市立菅谷西小学校)
実施学年	小学校6年生	教科	国語
单元名	登場人物の関係をとらえ、人物の生き方について話し合おう「海の命」		

《学びを深めたいポイント》

「登場人物の心情を書きなさい」、「作者が表現に込めた思いを説明しなさい」など、ある発達段階以上の国語科「読む」活動の成果は、往々にして「書く」により表現され、評価される。しかし一部の「書く」を苦手とする児童生徒は、「読む」の評価を不当に低くなされているのではないかと、「書く」がボトルネックになり「読む」をつまらないものになっているのではないかという疑念を、私は数年来、問題意識として抱えている。一人一台端末を活用し、「書く」だけではない様々な、そして容易な方法で、自らの「読む」について表明する。そして友達が表明した「読む」の活動を参考に、自らの読みに立ち返り、さらに作品の理解を深めていく。そうした授業の成立を目指して、「読む」楽しさの共有を目指した。

《SKYMENU 活用のポイント》

「SKYMENU Cloud」の「ポジショニング」機能を活用した。「ポジショニング」により、児童は課題に対して考えの立ち位置＝ポジショニングを、再配置可能なマーカで示すことができる。「ポジショニング」を用いることで、児童が自らの回答を表明したり、他者の考えとの異同を確認したりすることが可能となり、それが鑑賞文の評価および児童の授業に対する主観評価を向上させることを、富樫ほか（2022）では明らかにした。今回の実践はその継続・発展を目指した授業である。小学校6年国語科物語文の授業において、自己の思考の析出および他者との比較による自らの思考の客観視により、児童の「読み」を深めること、そしてその先にある「読み」の楽しさを実感することを目指して授業を行うこととした。

《実践内容》

	学習活動	SKYMENU 活用場面	活用のポイント
導入	1 作品テーマ「今日の太一の成長」について確認する。 ・本作品の全授業で児童が取り組むテーマとして「今日の太一の成長」を設定している。本時もこの視点で読解することを確認する。	【※1】全 6 時間の授業で、2～5時間目については「今日の太一の成長」という共通テーマで読みの授業を行う。「ポジショニング」4象限も共通である。	・児童は「ポジショニング」X軸とY軸を振り所にして、読み進めることができる。
展開	2 今日の太一の姿を「ポジショニング」に表明する。 ・本文を読む。 ・マーカを置く。	【※2】主人公「太一」の言動を根拠に、マーカの位置を検討していく。マーカの表示を自分のみ→全体とすることで、児童はまず自分の考えをも	【※3】児童にとって「読むこと」の成果を「マーカを置く」で表すことは、「書くこと」で表すより容易である。すべての児童

	・マーカの位置と本文とを往還しながら、太一の思考と成長について読み取る。	つことから始める。友人との比較の中で、探究的に読解を進めていく。	を学級の協働的な学びの場に参加させることが出来る。
まとめ	3 今日の太一の成長についてまとめる。 ・今日の読解をまとめて文章にする。		【※4】(google スプレッドシートを活用する。)

【※1】題材として、小学校第6学年物語文『海の命』を扱った。主人公である「太一」を中心に読みを進めることとし、「今日の太一の成長」という単元の共通テーマを設定した。主人公がさまざまな事件を経験し、他の登場人物と交流してどのように成長したかを検討し、自らの個別的な読解の成果をマーカによって表明する。そして友人との異同と交流によって協働的に自らの読みを客観視し、さらに読みを深めていくことを目指した。各色の円が児童のマーカを示している。

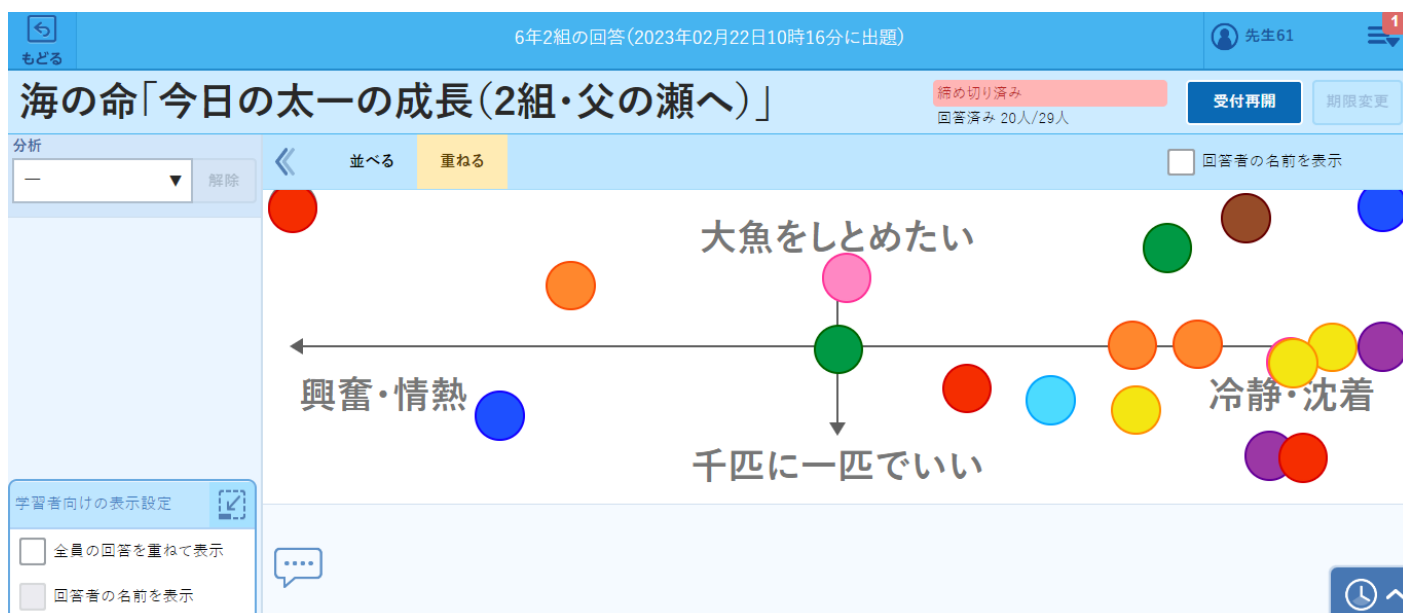


図1 示された各児童のマーカ

【※2】横軸は、左方向に「興奮・情熱」、右方向の「冷静・沈着」、縦軸は、上方向に「大魚をしとめたい」、下方向に「千匹に一匹でいい」と設定した。横軸で、ある時は感情を高ぶらせたり、またある時は落ち着いたりする太一の感情の動きについて、縦軸で父の仇であるクエを追いかける太一の根源的な欲求と、師「与吉いさ」の教えである命に対する謙虚な姿勢との間で揺れ動く思考について、4象限のフレームで自らの考えを表明できるようにした。児童は教科書の記述と座標平面を交互に見比べ、どこにマーカを置くか考え、置いたマーカの位置が適切か本文に立ち返るという往還の中で、自己の思考を深めていった。

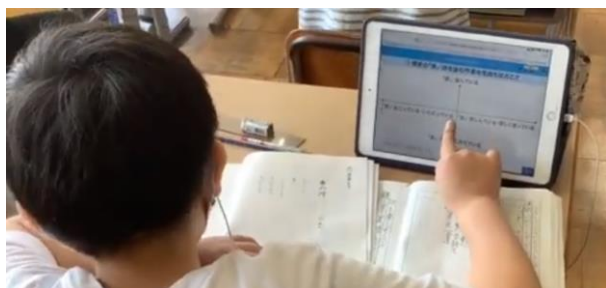


図2 本文を読みながらマーカの位置を決める

例えば図1の左上端「興奮・情熱」「大魚をしとめたい」の象限にマーカを置いた男児が、その理由を「母が止めているのに、それを無視しても父の死んだ瀬に潜って、父の仇を追い求めるのは、これは大魚をしとめるという強い気持ちがあるから、興奮しているといえるでしょ。」とその読みの根拠を述べると、彼と仲良しの右上端「冷静・沈着」「大魚をしとめたい」に置いた隣席の男児はそれを聞いて「うーん、20キロのクエを見ても興味をもたずにスルーしたのは、太一が冷静だからと思ったんだけど、確かに『父の仇をさがす!』で頭の中がいっぱいだからと言われれば、確かに冷静とは言えないのか? いやでも、探してる感じは冷静に追い求めてる感じしない?」と応じていた。そうした児童同士の相互作用が教室内のあちこちで行われると同時に、さらに自ら本文を読み直し、探究を進める姿が見られていた。

図3 マーカの位置について説明し合う

【※3】国語に苦手意識があり、「書く」活動では白紙、あるいはそれに近い状態のまま時間切れになってしまうことの多い児童も、マーカを置き、自分のマーカが友人のマーカと同じ画面に同時に表示されることで、協働的な読みに参加していた。全員が参加できる協働的な「読む」の授業は、「読む」成果の表出方法が「書く」では実現が難しい。「読む」成果を「マーカを置き、その理由を話す」によって表す方法をとったからこそ、「読む」により多くの児童が主体的に参加できるようになったと感じる。

【※4】国語が得意なある女児は、最終的にマーカを中心から少し下にずらした位置に置いた。授業後に、

母は、父の瀬に潜って欲しくないと言っているけど、言われても気にせず「自分のやりたいこと」を「自由」にやるようになったと思う。人に言われたことをやるんじゃなくて、自分のやりたいことを優先してできるようになった。

と、共通テーマ「太一の成長」に則り、感想を書いていた。4象限からなる思考のフレームだけにとどまらず、それを土台にしつつ自分の生活経験に根差した読みを深めたことがうかがえた。

《実践を振り返って》

5時間目の授業後に授業に関する主観評価を実施した。その結果、1)「海の命」の内容はわかりましたか、2)「海の命」の授業は楽しかったですかについて、全員が肯定的な回答となった。当該ツールを用いることによって学習内容の理解が促進され、満足度が高まったと考えられる。

1人1台端末上で作動する動的思考ツールを用いて小学校第6学年国語科物語文「海の命」で実践した授業は、「読むこと」の評価に関して児童の成績が向上するとともに、児童の主観評価について高い評価を得た。結果、児童が「楽しい」と思える読みの授業が実現できたと考えている。